

〔作家の方法〕

増田みず子

〈孤体〉の生命感

小説と生命の論理

岩波書店



「作家の方法」

増田みず子

《孤体》の生命感

小説と生命の論理



岩波書店

〈孤体〉の生命感

作家の方法

1987 年 12 月 15 日 第 1 刷発行 ©

定価 1400 円

著 者 ^{ます}増 ^だ田 ^こみ ず 子

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 ^{株式}岩 ^{会社}波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

ISBN4-00-003507-x

〈作家の方法〉

〈孤体〉の生命感

目次

プロローグ——小説へ 1

〈孤体〉として 7

生命を考える 20

1 生命体としての都市——『夢の島』を読む 29

増殖する土地 30

生命の循環 62

2 醜い星——『妖星伝』を読む 83

デフォルメされた人間と地球 84

発信された終末 116

生命感の諸相 159

痛切な抒情 160

第七官の夢 177

肯定の本能 189

生命感の構築 201

エピローグ——物語による実験

プロローグ——小説へ

「〈孤体〉の生命感」というテーマでお話することになりました。なるべくそのように努力するつもりですが、大勢の方の前で、小説についての話しをすること自体、私にとっては生まれて初めての経験ですので、うまくまとまってくれるかどうか心配です。

まず第一に、〈孤体〉という言葉がどうしてここに出てきたのか、それをお話ししなければならぬと思います。

もともと私の育った家というのが、あまり文学書に縁がありませんで、理科のほうの勉強をする人間が多くて、私自身も、ずいぶん長い間、学問とは理科、数学の類かと思ひこんでおり

ました。小説を読んだり書いたりするのに、そのためにわざわざ大学へ行くことはない、と親にいわれるまでもなく、自分でもそう思っていたようです。小説というのは、勉強をさぼって、こっそり読むものというような感じもありました。

今でもその感じはつきまっています。それで、ということもありますが系統的な文学の勉強をしないままにきてしまいましたので、こうして小説の話しをしなければならない場合に、大変困ります。

私はずっと生物学にひかれていました。大学、勤め先とも、その方面に進みまして、そのあいだに、行き当たりばったりに好きな小説を読むというやり方を続けてきたのです。

なぜ生物学を選んだかといいますと、子供の時分から、植物が生長することとか、虫や小動物などが動くこととか、あるいは、人がものを考えることなどに、非常に不思議な感じを抱いたのが最初のきっかけではなかったかと思えます。ひとつのことにこだわると、しつこく考え続けるのが私の性分です。その不思議さが大人になってからますます不思議に思えるようになります。不思議に思っているだけでも楽しいものですが、だんだんと、具体的に答えを探

したい欲求にも駆られるようになって、その後当然のように生物学という学問分野に進みました。

私は、子供時代からの延長で、たとえば人間を、とりあえずロボットののようなメカニクな存在として想定し、どのスイッチを入れるとどこがどう動きだすか、という具合に解明できるものだと思っていました。主として、人間の思考と感情のメカニズムが私の興味の中心でした。人間の体の複雑な組織の、どこがどのような刺激を受けると、どこからどのような物質が分泌されて、人はものを考えたり、感情的になるか、というようなことです。ものを考えること、自分で制御しきれないほどの感情、好奇心などは、私にとって、本当に謎だったのです。その謎を、私は、文学、哲学、思想の方面からではなく、もっと即物的な方法ですっきりと解き明かしたいと思いました。これは、性分がそうなのでしょう。情緒的なものが苦手で、さほど関心ももたないのですが、機械や道具の仕組み、システムといったものに、私は昔から気持がひかれるのです。

大学は当時、学生運動もからんで、受験競争の激しい時代でして、目的のところに入れませ

もありません。私にわかったのは、生命というのは実に不可思議な現象である、ということだけでした。で、研究のほうは、途中で投げだしまして、わからなさのほうを、どこがどうわからないか、というかたちで、文章にするようになりました。その結果でできたものが、私の小説なのです。

ですから、小説を書く場合も、その根底にどうしても生命観というものにこだわる気持が抜き難くあります。生命というものをどのような視線で見るか。それが私にとっての変わらないテーマといってもいい。小説に対する思いは、読む人にとっても、書く人にとっても、それぞれ違うはずですが、私の場合は、その生命の充実感にいきつくのではないかと思います。どんなかたちでも、そこに生命を感じることのできる小説を、書きたいし、読みたい。つまり、人は命というものをどう感じているか、という漠然とした思いなのですが、その場合、自分の命でも、他人の命でもいいわけです。

それは、ある意味で、すべての人に共通の、生命の原動力といってもいいのではないでしょ

うか。文学だけに限らず、人間は昔から、各種の分野において、生命というものの不思議さにとりつかれ、なんとか解明しようと、努力に努力を重ねてきたと思うのです。宗教、歴史、哲学、各種の学問、みな、根は同じだと私は思っています。

ですから、私はたまたま小説という方法を通じて、自分なりの生命観をつかもうとしているわけで、人に自分の書いたものを楽しんでもらうゆとりはまだ当分できそうにありません。小説を、自分の考えを進めるための手段にしている、というのが実情です。

ものを書いていきますと、無理にでも考えを進めないわけにはいきません。自分を煽るという作業も、しょっちゅう、することになります。その結果、自分が思ってもみなかった言葉も、煮つめられて、でてくることがあります。小説のなかで考えるにしても、私の考えのありったけを、フルに使わないとそこまで煮つめられませんから、どうしても、私にとっては一番なじみの深い生物学、生化学などの、ものの考え方を抜きにすることはできないのです。

〈孤体〉として

孤体の「孤」は、このあいだ書きました私の小説、『シングル・セル』の作品中で、シングル・セルを孤細胞と訳して使っています、それと共通しています。シングル・セルは、単細胞の訳でいいわけですが、日本語で単細胞というと、ちょっと誤解を招きかねませんから、孤独の「孤」を使いました。この、シングル・セルという言葉自体が、生物学関係の専門用語のひとつです。生体の組織を切りとって、薬品処理することによって結合組織を溶かし、ばらばらの細胞群にしてしまう。これを、single cell(s)と呼びます。詳しい説明は省略しますが、ひとつずつの細胞を、一人ずつの人間に見たてまして書いたのが『シングル・セル』という小説だと思って頂ければ幸いです。増田みず子は「孤」を書く、という評価をいただくようになってきました。私もそれには別に異議はありません。多分そうなんだろうと思います。

あまり前置きが長くなるといけません、**「孤」**についても少し……。先日、『字義字訓辞

典』(角川書店)を眺めていましたら面白くて、つい調べてみたのですが、この「孤」という字は、皆さんもご存知のように、本来「孤児(みなしご)」の意味なのだそうです。みなしごというのは、幼くして父なき者、の意です。幼いときに父をなくした者を、「孤」と表わしたそうです。後にそれが転じて、「一般に他と離れて独りである者」というような意味で使われるようになりました。そして、「独」は「老いて子なきを独という」からきております。

言葉というのは知ってみると面白いものですね。『シングル・セル』の「あとがき」に、この「孤」を使ったことについて、先刻申しあげたように「孤細胞」でなくて本当は「単細胞」の訳でも構わないと書いておいたのですが、その「単細胞」の「単」の本来の意味は「ひとつ」でして、「ひとえ」「ひとり」「ひとかきなり」というイメージなのです。「二重」ですね。そうして「単」の対語が、「単複」の「複」です。

「複」とは、衤(衣)篇が示すように、もともと布、着物の意をもつ語でして、裏のない着物が「ひとえ」であり、裏のある着物を、「複あわせ」といったのですね。ですから、「複」には、綿入れの着物などから転じて、「二重」「重ねる」という意味があるそうなのです。それに対しての

「単」なのですね。

そのことに忠実にしたがって、私の書名『シングル・セル』を訳すとなれば、やはり、「単細胞」ではちょっと意味が違ってくるかもしれない。「孤細胞」のほうがどうもぴったりするようです。

ついでにいいますと、個人の「個」は単純に数を数えるときの言葉で、箇と同じ使い方をするということです。同じ「ひとつ」でも、文字によって意味がちがひ、使い分けも当然しなければならぬ。それこそ、同じ「一人」でも、人それぞれに性分も能力もちがひ、当然、生命感もちがってくるわけでして……。

なぜいまここで「孤」にこだわるかといいますと、もともとは私自身の個人的な事情からはじまったことで、それは一種の特殊例として、これまでの作品中に全力投球で書き続けてきたつもりなのです。それが最近になってから、社会は孤の時代であるとか、そういうようなことがいわれてきまして、私の作品がその時代感覚に合っているといわれたりすることも、ときどきあります。ああ、そうなのかな、と自分で驚いたり不思議がったりしていますけれども。た

だ、改めて考えてみますと、実際に、人がみんな、ひとりずつ孤立化していく時代だと領ける気はいたします。

この際、自分の個人的な感情から離れて、どうしてこれほどまでもひとりひとりが孤独を味わわなければならない時代になったかという問題を考えないわけにはいきません。

私は戦後生まれで、戦争の前の時代を実感するというのは無理ですが、自分が生きてきた三十数年だけを思いだしてみても、時代をとりまく雰囲気はだいぶちがってきていて、みんな、大人から子供にいたるまで、精神的にひとりぼっちになりかけているという実感があります。思いが他に通じない、わかってもらえない、わからない。私が思うのは、各世代の人が世代単位にそれぞれ孤立して、また同じ世代のなかを見れば、そこでひとりひとりが孤立しているというような状態が、いまこの時代になって自然に、あるいは偶然に集約してきているということです。たくさんさんの川が合流するように、太い一本の流れになっていると思うのです。かつては個々の孤独であったものが、ここへきてみんなの共通の孤独になってきた、ということでしょうか。ただし、世代によって、孤立化するようになった事情は、それぞれにちがうのではな

いかと考えます。ちがうけれども、各方面から、一カ所に集まるようにして、偶然この時代でそれが一斉に現われつつあるのではないかという気がするのです。

大ざっぱに齢の順で、まず老人からいいますと、戦争という大きな境を越えて生きた人々が、今、齢をとって力がなくなってきたということがあると思います。戦争による、大きなぎる破壊や崩壊を味わってきて、そのなかで懸命に生きるだけのためにエネルギーの全部を使ってきた、その力が尽きかけている。同じ経験をもった人たちがだんだん亡くなって少なくなってきた。戦争を知らない若い人たちが世の中を動かしている、というわけでした、不安、孤独を感じないわけにはいかないでしょう。

それから、きょうこれからお話しする日野啓三さんの作品『夢の島』の主人公、境昭三の世代が、次にあります。いま五、六十代の人々です。この人たちにとっては、終戦直後の焼野原がスタート地点だといってもよいと思います。彼らは自分が成長するとともに世の中も復興してきたという特徴があります。その復興にももちろん彼らは手を貸していますし、中心になって各方面の仕事に力を尽くして、新しい世の中をつくりあげてきたということが出来ます。そし